



Title	写真家 東松照明らが表現し続けた生活者の思想的営為―「写真実践」より拓かれていく見過ごされてきた「戦後」の暮らしとその重み―
Author(s)	吉成, 哲平
Citation	大阪大学, 2025, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/101591
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

論文内容の要旨

氏 名 (吉成 哲平)

論文題名

写真家 東松照明らが表現し続けた生活者の思想的営為
—「写真実践」より拓かれていく見過ごされてきた「戦後」の暮らしとその重み—

論文内容の要旨

アジア・太平洋戦争の終結から約80年が経ち、戦争体験者の直接的な証言が聞き取れなくなる「ポスト体験時代」に向かいつつある今日、その体験や記憶の未来世代への継承が喫緊の課題となっている。こうした社会的背景の元、社会学や歴史学の領域を中心に、今日の東アジア情勢を踏まえながら、冷戦下の朝鮮半島やベトナムなどの東アジアで生じてきた戦争と「戦後日本」との結びつきがこれまで見過ごされてきた課題を念頭に置きつつ、重層的な歴史空間として「戦後」を問い直す必要性について論議されている。中でも「ポスト体験時代」における戦争体験や記憶の継承を巡る既存研究では、「戦後」において戦争体験がいかに語られ、記憶されてきたのかに関する当事者への聞き取り等の重厚な研究の蓄積に加えて、とりわけ近年の動向としては、映像資料を扱う質的調査やビジュアル・エスノグラフィ等の映像を用いた研究が進展しつつある。一方、写真資料に関しては、作家論を中心としてきた美学や芸術学から、社会学や歴史学、民俗学等の多分野へと研究領域が広がる中で、従来の文字資料や口述記録に加えて写真資料を用いて戦後史を描く研究の重要性が指摘されながらも、いまだほとんど開拓されていない状況にある。

従って本稿では、「ポスト体験時代」へ向かういま「戦後」を問い直す必要性を踏まえた上で、東松照明を軸に「戦後」を生きた写真家たちがひとびとの暮らしの現場を目の当たりにし、記録し続ける中で、未来へと託された貴重な諸作品を残してきた実践的展開に注目した。とりわけ、写真家たちが「表現者」として現場での撮影行為を介して徐々に受け止めていくプロセスの重要性が等閑視されているという既存研究の課題を超克するために、自身の撮影経験での身体感覚にも後押しされながら、「写真実践」という独自の的方法論（吉成 2021）を開拓してきた。ここで言う「写真実践」とは、写真家たちが刻々と残していった多様な表現媒体を渉猟し、当時の時代背景も踏まえた上で、彼ら彼女たちが撮影行為を介して受け止めていった現実とその思索の深まりを体系的に捉え直していく方法論である。この方法論は、現在から過去を回顧するのではなく、写真家たちが見えない未来を眼差しつつ撮影を続けていった当時の視点に降り立つという「歴史内在的」な理解を重んじつつ、彼ら彼女たちの見つめた現場で筆者が再帰的な撮影活動も積み重ねながら相補的に論証していくことを特徴とする。特に、写真家が撮影行為を介して直面した暮らしの現実への衝撃から、写真家として何が出来るのかを内省しつつ、撮り続けることでその距離を埋めようとしていった写真家たちに着目していることに留意している。加えて、第3章で述べる通り、この新たな方法論の構築に際しては、柳田民俗学の心意論や鶴見俊輔によるプロスペクティブな視点からの歴史記述の方法など、生活の切実な現実と向き合う中で先人たちが練り上げてきた諸理論を既存の研究領域を横断しつつ援用してきた。なぜなら、戦後の社会科学における科学化・計量化並びに専門分野での細分化が進む傾向が見られる一方で、個々の人間の生活に通底する本質を見極めつつ、人々の生活を基軸に諸学と対話していく新たな体系的学の創成には未だ途上にある点に鑑みれば、「写真実践」から描き出される生活者の思想とその営為は再びまなざされる「未来」に向けられているという、写真家の表現活動を介してこそその重要性を秘めているからである。

従って、本研究では、写真家 東松照明（1930-2012）の足跡を軸として、彼が表現し続けた「戦後」の生活者の思想的営為を独自の的方法論である「写真実践」により明らかにすることを目的とし、さらにその内実を明らかにする上で、彼の足跡を辿り直すために訪れてきた長崎や沖縄において、筆者が再帰的な撮影行為を介して受け止め深めていった記憶や過去からの重層的文脈を未来に継承していく動態の意味についても具体化した。

序章に続く第2章と第3章では、まず、「戦後」の暮らしを見つめ直していく「写真実践」という独自の的方法論の可能性を検討した。すなわち第2章では、「ポスト体験時代」における戦争体験や記憶の継承を巡る研究動向を押さえつつ、中でも近年活発化する映像資料や表現を用いた関連研究と「写真実践」との立ち位置の違いについて確認した。これらの既存研究では、当時の写真家たちが激動する「戦後」をひとびとと共に生きていくという「伴走者」という役目を果たしながら撮影を続ける中で、自らの写真表現を未来に託していったという重要な側面が見過ごされてきた課題が浮かび上がってきた。加えて、映像の中でも写真資料を用いた関連研究の精査からは、写真研究が多分野

へ広がってきた一方、写真が過去の特定の時代や社会を描くための客体的な資料や情報として論じられがちであったことが分かってきた。ここで最も強調すべきは、美学や芸術学での作品中心主義的な視角により、当時の社会的、歴史的な文脈から乖離して写真家たちの残した作品が定型的に論じられ続けているという根源的な課題である。

そこで、以上の課題を踏まえ、第3章では「写真実践」という独自の的方法論により、写真家が撮影行為を介して現場で受け止めた当時の暮らしの現実を解釈するために、その理論的な基盤を補強しつつ精緻化を行った。

他方、第4章での東松の足跡に関する先行研究の精査から浮き彫りとなったのは、概して戦後社会を告発した「社会派」であり、喚起的な映像を多用した「映像派」としての写真家像が定型化されることで、その現実と向き合い続けた彼の撮影行為の重みが見過ごされてきた課題である。中でも「名取＝東松論争」（1960年）に象徴される通り、写真を組むことで社会的な出来事をストーリーとして描いた「報道写真（組写真）」への反発から東松が提起した「群写真」を巡っては、当時の現実から乖離した抽象的なイメージとしての議論に収斂してきたことが窺える。加えて、特に復帰後の沖縄での足跡に関しては、占領に対する批評性の喪失と「南島イデオロギー」が強調されるなど、いずれも後年になって鑑賞者の視点に即すことにより、いかようにも写真が解釈されてしまう危険性も見えてきた。

そこで、まず第5章では、生涯にわたる撮影活動の原点としての鮮烈な敗戦と占領体験を通じてアメリカに対する複雑な葛藤を当時の東松が抱えつつも、敗戦を経験した一人の生活者として、生活の中で様々な困難や矛盾を抱えながらも生きていこうとするひとびとを捉えていったことを「写真実践」により具体化した。他方で、60年安保を経て日米が結びつきを深める中、ひとびとの暮らしが再び翻弄されていく現実を前にして、彼にとって戦後の「アメリカニゼーション」は、かつての戦争がもたらした忘れてはならない死を内包していたことが浮かび上がってきた。

更に第6章では、高度成長のひずみが各地で噴出していく1970年前後において、幕末・明治維新から敗戦までの写真表現の歴史を初めて体系化した「写真100年」展（1968年）を通じ、近代日本の進歩の影で忘れ去られてきたひとびとの窮状を東松ら当時の写真家たちが内省しつつ、一見すると「平和」な現実を捉えていくためにそれぞれの現場で表現を模索していったことを明らかにした。すなわち、被写体の「代弁者」として現実を告発していった桑原史成や、写真の匿名性を重視し、即物的に写真を残そうとした中平卓馬などのそれぞれ異なる立ち位置の中で、撮り続けることにより、眼前の現実との「距離」を絶えず埋めていこうとした東松の独自の立ち位置が浮かび上がってきた。

以上を踏まえつつ第7章では、初めて訪れた復帰前の「基地の中の沖縄」の現実には衝撃を受け、日米の狭間で不安定な生活を余儀なくされるひとびとの暮らしを本土に暮らす「私たち」の問いとして拓いていったことを明らかにした。とりわけ、「本土の人間の一人」として日本本土と沖縄との非対称的な関係性の歴史を遡りつつ、「平和憲法」が空文化する同時代の日本本土の現状を省みながら、東松は沖縄復帰を容易には肯定し得なかったことを特筆しておく。

それゆえに、復帰前後の沖縄における東松の撮影表現を巡る模索について論じた第8章では、「豊かな社会」の達成の一方で、当時の表現者たちに管理社会化が危惧された時代状況を背景として、「アマチュアリズム」に根ざしつつ、沖縄で出会った一人ひとりが生きてきた歴史を聴き取りながら、現場での「私」の経験から常に生み出してゆく表現（「私性」）を、同じ時代のひとびとにだけでなく、未来へと拓こうとしていたこと（「公性」）が見えてきた。

その上で第9章は、施政権返還後に日本本土では「沖縄問題」への関心が急速に低下していく時代の中で、東松は東南アジアを旅しつつ、復帰後の「複雑なシマの表情」に直面する一方で、それぞれの土地で脈々と続いていく暮らしの歴史の厚みを確かめていったことが見えてきた。しかし、それは急速に広がる開発や観光の影で見過ごされていく、沖縄戦とベトナム戦争という二重の「戦後」の暮らしの現実でもあった。それゆえ、沖縄で生まれ育った写真家たちの表現に彼は期待を寄せながら、自らの立場から沖縄の生活の現実を表現し続けていこうとしたことが分かった。

そして第10章では、以上の沖縄での経験を背景に移住した長崎での「町歩き」を通じて、東松はキリシタン信仰や中国との結びつきなど、数世紀にわたり培われてきた長崎の町の「チャンポン文化」に魅せられつつ、長崎や沖縄、中国を結ぶ東シナ海を巡る重層的な歴史を次第に受け止めていったことを明らかにした。

以上の東松の足跡から浮かび上がる「戦後」の生活者の思想的営為を踏まえ、第11章では、筆者が長崎と沖縄で「町歩き」をしつつ再帰的な撮影行為を介して徐々に拓かれていった「戦後」の記憶の継承の可能性を検討した。とりわけ、記憶の継承に尽力する現場で筆者が出会ってきたひとびとは、「体験者」と「非体験者」を繋ぐべく存在である「伴走者」でもあり、彼ら彼女たちに学ぶことで、東松の表現し続けた当時の生活の現実から現在へのつな

がりが受け止め直されていくという連続的な様相を次第に実感していくことが出来た。

終章となる第12章では、鶴見俊輔が論じた「弱い個人」の運動や鶴見和子らの生活記録運動など、生活の中に根拠を置いた敗戦後の表現を参照しつつ、東松の写真表現の重みを諸学との対話へ導いた。すなわち、東松は「戦後」の生の中にある死を忘れることなく未来に表現し続けていったことを明らかにした。まとめとして、福島や水俣、東京での筆者の撮影行為を介した経験も内省しつつ、「ポスト体験時代」へ向かう今日、見過ごされてきた「戦後」の暮らしを「写真実践」により拓くことで、それぞれの現場での模索が未来の歴史をつくっていくことを展望した。

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏 名 (吉 成 哲 平)			
論文審査担当者	(職)		氏 名
	主 査	教授	三好 恵真子
	副 査	准教授	小林 清治
	副 査	准教授	青野 正二
	副 査	教授	白川 千尋

論文審査の結果の要旨

本論文は、「戦後」という自明とされがちな枠組みにより見過ごされてきた様々な人びとの暮らしを見据えつつ、「写真実践」という独自の方法論を開拓し、同時代を共に生きた写真家たちの当時の視点へと接近することにより「戦後」の生活者の思想的営為を討究するとともに、現在への連続性を問い直しながら「記憶の継承」として未来へと拓いていくことを可能にした渾身の秀作である。

戦後80年に近づき風化が進むこれらアジア・太平洋戦争を巡る体験と記憶は、戦争体験者の証言が聞き取れなくなる「ポスト体験時代」へ突入しつつある今日、未来世代への継承が喫緊の課題となっている。これまで歴史学や社会学の領域を中心に「記憶の歴史化」に光を当て、歴史叙述では見ることのできなかつたあるいは見過ごされてきた側面に注目し、新しい視座から歴史を見直そうとする試みがなされている。その一方で、歴史資料や証言のアーカイブ化、さらにはAIとデジタルを活用するテクノロジーによる復元が広く注目され、「記憶」が客体化され「記録」化していく時代へと移り変わる傾向も高まっている。

そこで本論文では、「ポスト体験時代」へ向かう今日において、「戦後」を問い直す必要性を改めて認識した上で、「写真実践」という独自の方法論を提起している。この方法論は、申請者自身が表現活動を持続してきた写真家でもあるというその素養を活かしつつ、目の前の現実と全身で向き合い、次々に過去となりゆく出来事への応答の中で撮り続ける行為を通じ、やがて自らの思索を深化させる経年的実践に目を向け、写真家たちが遺した多様な表現媒体から立体的に辿り直すことで見えてくる内実を具体化するものである。そして従来の写真史・写真論や映像民族誌等の関連研究の視角との差異化を図りながら、生活史や近現代史、あるいは社会運動論等の接点を模索しつつも、更なる領域横断的な議論へと切り拓くことを試みている。とりわけ、柳田民俗学の心意論や70年代の大衆文化論に大きな示唆を受けつつ、石田忠の長崎被爆者の生活史研究、鶴見和子の生活記録運動、さらには鶴見俊輔や小田実らの生活者の思想との緻密な応答を図ることにより、「戦後」を捉え直す新たな方法論としての精緻化に成功している。それゆえに写真家の表現活動の足跡を「写真実践」から分析する意義は、見えない未来を見据えながら、過去のその時点において人々がどのように葛藤しつつ生活しているのかという、彼らが直面した現実について、プロスペクティブな視点から、いつか写真を目にする未来世代へと託されているという、その撮影表現への深い理解である。すなわちそれは、「結果の権力というべき「強い歴史」の効果」によって「できごとを観察し、追跡し、裁断する危険」に対し常に反省的である必要があるとする社会学者の佐藤健二が示唆する「歴史内在的な理解」とも響き合うものでもある。

本論文における「写真実践」の分析の中心となるのが、「戦後写真の巨人」として評される東松照明(1930-2012)の表現活動である。東松は、戦前に生まれ、敗戦を契機に進行する日本の「アメリカニゼーション」を米軍基地のある街の風景から捉えた「占領」シリーズをはじめ、1950年代中頃より半世紀以上にわたり戦後日本を撮り続けた写真家として知られる。ただし既存研究において、東松の活躍してゆく60年代の写真表現については、それ以前の表現と一線を画する、「個」としての視点から表現された映像自体のインパクトやその象徴性のみが特徴付けられ、東松自身については、「土着的」な視点から戦後社会を批判的に捉える写真家として見なされてきた。とりわけ、「組写真」というストーリーを重視する前世代までの表現方法とは自らも強く区別してきた、東松独自の表現である「群写真」の分析については、撮影者である東松の思索とは非意図的に切り離され、概してある誌面上の写真と写真の組み合わせである「編集」とそこから浮かび上がる象徴的なイメージにのみに焦点が当てられ、議論がなされてきたとする。さらに1970年前後は、戦災復興から急速な高度成長を遂げ、戦後日本が経済大国となり「豊かさ」が達成される一方

で、沖縄返還、学生運動、日米安保改定、公害問題等、列島各地でそのひずみが顕在化してゆく時代であった。本論文では、「昭和元禄」とも呼ばれた一見すると平穏な日常の中であって、繁栄する社会の実情を人々がどのように捉えていったかを見過ごしてはならないと強調し、その解明のために新たな方法論「写真実践」の重要性へと接合させている。

よって本論文では、「写真実践」より東松照明の生きた視点に立つことで、彼が表現し続けた「戦後」の生活者の実相の内実とその思索の深まりがもたらす未来への意味を具体化することを試みている。60年代初頭に初めて長崎を訪れた東松は、戦後も見過ごされたままの被爆者の厳しい生活に直面したことに鮮烈な衝撃を受け、撮影への葛藤を抱えつつ、晩年まで長崎の現実との「距離」を埋めてゆくことへと突き動かされていった。また、「復帰前」に訪れた沖縄で施政権返還が決定的となる中で、沖縄のひとびとの希求する「平和憲法」が空文化し、民主主義への無関心が広がり、各地で公害が噴出する本土の現状への矛盾と葛藤を抱え、それゆえに東松は本土に暮らす「私たち」への問いとして沖縄の現実を拓こうとしていたのである。さらに復帰後の沖縄で東松が表現し続けていった人びとの暮らしの実相については、観光リゾート化の影で見過ごされていく沖縄戦とベトナム戦争という二重の「戦後」の現実にも直面しながらも、沖縄で生まれ育った写真家たちの表現に期待を寄せつつ、それぞれの立場から沖縄の生活の現実を表現し続けたことを明らかにしている。すなわち東松の軌跡から浮かび上がるのは、敗戦後の「アメリカニゼーション」がもたらした社会変容に直面しつつも、東アジアに開かれた重層的な歴史の上に各地域で営まれ続けるひとびとの暮らしであった。他方で、このような解明には、申請者自身の現場での再帰的な撮影行為が不可欠となり、さらにそれを介することにより、今を生きる人々に東松が託した「戦後」の記憶をいかに継承し得るのかについて、未来への展望を拓くことを可能にしているのである。

以上を踏まえつつ、本論文全体から浮かび上がるのは、敗戦から豊かになっていく社会の影で見過ごされてきた人びとの暮らしの中で抱え込まざるを得なかった矛盾と葛藤であり、それでも各地域の歴史の上に脈々と続いていった暮らしの営みであったと言える。つまりそれは、鶴見俊輔が論じたように、戦中と敗戦の記憶を暮らしの中で保ち続けながら「戦後」の現実と向き合いつつ、現状に対して出来る限りのことを続けていく「弱い個人の重さ」へと拓かれていくものである。

本論文は、12章からなる労作であるが、その中核は既に14編の学術論文として公表しており、多様な専門領域で高い評価を得ている。また巻末には、申請者による現場での再帰的な撮影行為から残された写真の一部が収録されており、本文の厚い記述に加えて、言葉にはならない横溢するものから「写真実践」を実感できるようにと作品には細心の配慮が埋め込まれている。

本研究における最大の学術的功績は、「写真実践」という独自の方法論の開拓にあることは自明であり、さらにそれは「生活者」の思想的営為という普遍性を見据えながら、人間にとっての「生活」（生きることを意味する）を探究する研究領域として体系化され、諸学の対話を取り戻す役割を果たす可能性を持つことも主張しておきたい。戦後の社会科学における行動科学や機能主義の隆盛に伴う科学化・計量化並びに専門分野における細分化が進む傾向が見られる中で、それに対峙するために個々の人間の生活を見つめながら、そこに通底する本質を見極めようとする力強い機運が1970年代より高まり、徐々に発展しつつあるものの、人々の生活を基軸に諸学と対話し得る新たな体系的学の創成は、いまだ途上にある。それゆえに「写真実践」から描き出される生活者の思想とその営為は、その時代・社会背景や歴史的潮流の中に埋没するものではなく、再びみなざされる「未来」に向けられているという、写真家の表現活動を介してこそその重要性が秘められている。つまり、写真家の生活史そのものを描くこととは異なり、写真家とその被写体との間で、撮影を通じて経年的に築かれた関係性や見出された内実を、分析者が様々な表現媒体を通じて再構成し、自身の再帰的解釈も加えながら「二重に焼き出すこと」へとつなげている点が極めて重要になると考えられる。すなわち「写真実践」の方法論から生み出される普遍的価値は、広く近代知によって失われた全体性、複雑性、多様性、内発性等の回復を試みるものであり、それは「ポスト・デシプリナリー」として、学問への貢献に留まらず、それらを超克した生活者としての叡智を創造する唯一無二の独創性が期待できることを最後に強調しておきたい。

以上、論文審査の結果、本論文は、博士（人間科学）の学位を授与するにふさわしいものと判定した。